『西南アジア研究』No. 81, 2014

『チャチュ・ナーマ（Chach nāma)』に見られる チャチュ朝下のスィンド地方社会[1)]

二　宮　文　子

西暦711年，ムハンマド・ブン・カースィム率いるアラブ・ムスリム軍がスィンド地方を征服した。このスィンド征服の様子を伝える史料の一つに『チャチュ・ナーマ』がある。本稿では，この『チャチュ・ナーマ』を，スィンド地方社会の形成過程を説明する書物と位置づけた上で，その中に描写された地方社会の特徴や，チャチュ朝の支配体制について整理する。アラブ侵入期のスィンド地方の社会状況に関しては，すでにマクリーンやウィンクによる優れた研究がある［Maclean 1989 ; Wink 1996 ; 144-189］。これらの研究は，アラブによる征服を通してスィンドがムスリムの活動圏に含まれた点を重視し，征服の前と後の社会変化に主な焦点を当てている。マクリーンはチャチュ朝下の社会変化に関して重要な指摘を行っているが，それは主に宗派と経済活動に関わる点であり，チャチュ朝の支配体制については分析が及んでいない［Maclean 1989 : 65-66］。本稿は，このような研究状況に対して若干の知見を補うものである。

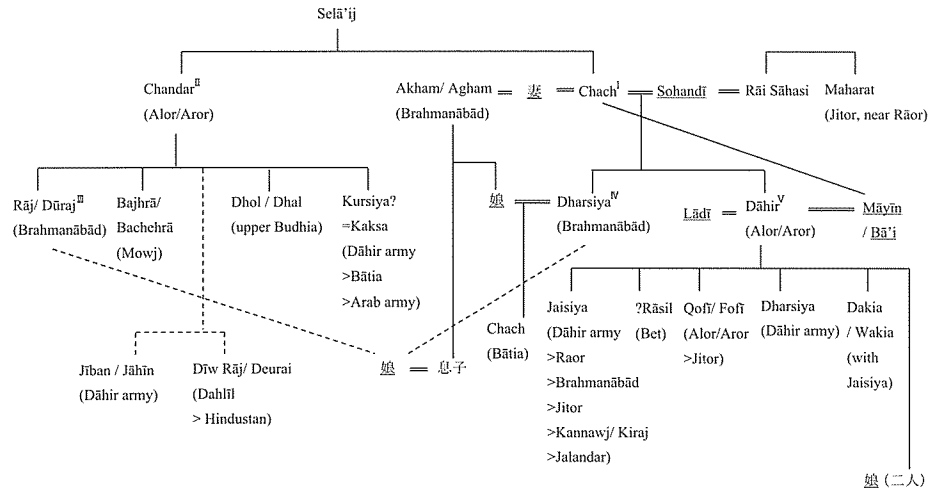
Ⅰ　『チャチュ・ナーマ』の性格

『チャチュ・ナーマ』は，613/1216年以降に，アリー・ブン・ハーミド・クーフィーによってアラビア語からペルシア語に翻訳され，当時ウッチュを根拠に独立していたナスィールッディーン・クバーチャに献呈された。アリー・クーフィーは，ホラーサーンやイラク，ファールスなどの地域の征服に関する既存の記録のような形でヒンドゥスターンの征服について記している書物を探していたところ，スィンド北部のバッカルのカーディーであるイスマーイールのもとで，彼の先祖の手になるアラビア語の書物を発見し，それをペルシア語に翻訳したと序文で記している［CNd : 9-10］。

アッラーとムハンマド，クバーチャへの賛辞と，翻訳の経緯を記した序文に続くのは，アラブ・ムスリム軍に倒されることになるチャチュ朝の歴史である。ラーイ朝[2)]のサーハ

1）　本稿は，2014年6月11日にムンバイ大学にて行われたセミナー「King Dahar – As a Person」における発表原稿を，主催者の許可を得て翻訳・修正したものである。

2）　英領時代のガゼッタは，この王朝の名称をラーイ朝 Rai Dynasty としており，現在の研究も多くはこの呼称を採用している［*Imperial Gazetteer of India* : vol. 6, 275 ; Wink 1996 : 152］。一方，アラブ侵入期のスィンド社会を詳細に検討したマクリーンは，この王朝を Sīharsī Dynasty と呼んでいる［Maclean 1989 : 6］。本稿ではラーイ朝の呼称を用いる。



※人名の読みは，ペルシア語テキスト表記と英文表記を併記し，女性には下線を付した。
※確定できない関係は点線で示し，確定できない人名の読みにはクエスチョンマークを付した。
※人名の下に付した（　）内は，当該人物が活動していた場所を指す。

系図　チャチュ一族

スィー Sāhasī 王の宰相であったバラモンのチャチュ Chach は，王の死後に王妃と結婚し権力を握る。チャチュは近隣地方の王の侵攻を退けた後，スィンド地方の各地に遠征し，独立勢力を平定する。チャチュの後を彼の兄弟チャンダル Chandar が継ぎ，その後チャンダルの息子ラージ Rāj，その後はチャチュの息子ダルスィヤ Dharsiya が王となる。ダルスィヤの兄弟ダーヒル Dāhir[3] は王位を狙いダルスィヤと対立するが，ダルスィヤが病死してダーヒルが王となる。内容としては，ここまでが前半部分とみなせる。この部分の分量は，全体の３分の１ほどである。

後半部分は４人の正統カリフの歴史から始まり，ウマイヤ朝のワリード時代までに行われたスィンド征服の試みの概説，ハッジャージュがムハンマド・ブン・カースィムをスィンドに派遣する経緯と，スィンド征服の過程が説明される。ムハンマド・ブン・カースィムのスィンド上陸後は，アラブ・ムスリム軍の動向に加え，ダーヒル側の動きも描かれる。戦いの描写の合間には，ハッジャージュとムハンマド・ブン・カースィムがやり取りしたとされる書簡が引用されている。ダイブルの攻略，ダーヒルとの決戦，ブラフマナーバードの陥落が後半部分の山場である。

『チャチュ・ナーマ』の最後を締めくくるのは，ムハンマド・ブン・カースィムの刑死である。一般には，彼はハッジャージュの死によって後ろ盾を失い，新たに即位したカリフ・

3）　現在の南アジアの英語文献ではダーハルと表記される場合が多い。しかし，アラビア語やペルシア語の史料ではダーヒルという読みが示されており，ダーハルという読みの根拠は明らかではない。なお，本稿で扱うスィンドの人名や地名はバリアントが多いが，筆者の知識では数あるバリアントの中から妥当な形を判断することは難しいため，基本的に『チャチュ・ナーマ』校訂本デリー版の本文に現れる形に従って転写を行った。イスラマーバード版校訂本の注では，校定者のバローチーがスィンド語の知識に基づく人名や地名の比定を行っている［CNi］。

スライマーンによってスィンドから呼び戻されて処刑されたと理解されている［Friedmann 1993］。一方『チャチュ・ナーマ』では，ダーヒルの二人の娘が，カリフがムハンマド・ブン・カースィムに対して疑いを抱くようにしむけ，処刑させたとされる。

序文において『チャチュ・ナーマ』は，「ヒンドの歴史の書にしてスィンドの征服の物語(kitāb-i tārīkh-i Hind wa muqarrar-i fatḥ-i Sind)」と呼ばれている［CNd : 8］。先行研究においても，アラブ・ムスリムによるスィンド征服に関する情報源として用いられていることが多い［Friedmann 1977 ; Friedmann 1984 ; Gabrieli 1958］。一方で，『チャチュ・ナーマ』は，チャチュ朝の歴史や，ムハンマド・ブン・カースィムに宛てたハッジャージュの書簡など，単なる征服の記録を明らかに越えた情報を含み，アラブ軍のスィンド侵入を扱った他のアラビア語・ペルシア語史書とは性格が異なる。そのため，『チャチュ・ナーマ』はアラブ侵入時のスィンドの社会状況についての情報源として用いられたり，さらには騎士道物語あるいは政治思想を説いた作品として読む試みもなされてきた［Friedmann 2004 ; Hardy 1981 ; Maclean 1989］。

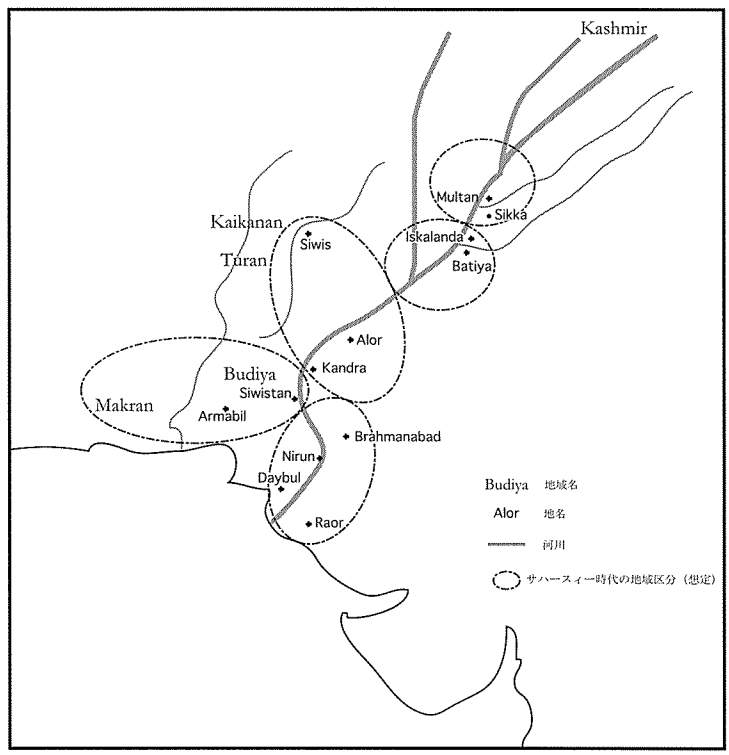
『チャチュ・ナーマ』がナスィールッディーン・クバーチャに献呈されたという事実は，本書の性格を理解する際に見落とされてはならない点だと考えられるが，管見の限り，先行研究では十分に論じられてはいない。クバーチャはゴール朝のムィッズディーンの奴隷軍人であり，1203年にムィッズディーンによって征服後間もないウッチュに任じられた。彼は主人の死後1210年に独立を宣言し，1228年にデリーのイルトゥトミシュに敗北するまでウッチュを拠点としてスィンド地域北部を支配した。『チャチュ・ナーマ』の翻訳者のアリー・クーフィーはとある出来事によって故郷を離れたと語っており，モンゴル軍による中央アジア占領に際してスィンドへ移住した可能性が高い。一方，『チャチュ・ナーマ』のもとになったアラビア語の書物を提供したイスマーイールはムハンマド・ブン・カースィムと同じサカフィー族に属し，ムハンマド・ブン・カースィムのスィンド征服時にスィンドに移住して土着化したアラブ系スィンド人とみられる。ここから，スィンド地方の征服者にして新参支配者であったクバーチャに対して，13世紀初頭のスィンド地方社会の構造やその成り立ちを解説するための書物を，アラブ系スィンド人イスマーイールが提供したという構図が導かれる。スィンド地方社会の成り立ちを説明するためには，アラブ・ムスリムによるスィンド征服を扱うだけでは不足で，チャチュ朝の歴史が必要とされたのだと考えると，『チャチュ・ナーマ』の構成は理解しやすい。

著名なインド中世史学者チャットーパドヤーヤは，インド史における西暦6-7世紀から12-13世紀を「地方的な政治，経済，社会宗教秩序の形成過程」が見られる期間であり，その過程は特に各地方における国家形成の中によく現れると指摘している。［Chattopadhyaya 1994 : 18-19］。奇しくも『チャチュ・ナーマ』は，チャットーパドヤーヤが想定した地方社会の形成期が終わる頃に新たな地方支配者となった人物に対して，この期間の始めの時代における社会形成の様子を解説するために献呈されたと言えよう。

Ⅱ　『チャチュ・ナーマ』に見られるチャチュ朝下のスィンド

1　チャチュの遠征の意義

ラーイ朝のサーハスィー王の死後に王位を簒奪したチャチュは，近隣地方のジトール Jitor の王にしてサーハスィー王の兄弟のマハラト Maharat の侵攻を退けた後，スィンド内の各地域への遠征を始める。大臣ブディーマン Budhīman との会話の中で，この遠征の目的は，サーハスィー王時代にスィンドの各地域に置かれていた王を従えることだと説明される［CNd : 31 ; CHt : 24］。『チャチュ・ナーマ』によると，サーハスィーはスィンド地方を以下の 5 地域に分割していた。1：自らが治める首都アロール Alor とコータ・ブン・カーカ Kota b. Kāhka 支配下のカイカーナーン地域 Kaikānān（スイーヴィース Sīwīs を含む），2：アガム・ローハーニー Agham Lohānī 支配下のブラフマナーバード Brahmanābād（ニールーン，ダイブル，ローハナ族とサンマ族の土地を含む），3：マッタ Matta 支配下のスィーワスタン Sīwastān（ブーディヤ地域 Būdhiya とマクラーン地域を含む），4：チトラ Chitra 支配下のイスカンダ Iskanda とバーティヤ Bātiyah，5：バジェーラー Bajherā 支配下のムルターンとスィッカ Sikka（地図）。これらの地域勢力は，サーハスィー王がそれぞれの地域の支配者として任じたとされている。しかし，チャチュ朝の時代にもしばしば地域



地図　サーハスィー時代のスィンド

支配者の地位が世襲されていることから，実際はこれらの地域勢力はそれぞれ自律的に存続しており，ラーイ朝王家との関係も薄かったようである。

チャチュはまず北に向かってチトラとバジェーラーを破る。そこから戻って首都アロールを経由してカイカーナーンに赴き，コータと彼の父カーカから定期的な貢納の約束をとりつけ，次いでスィーワスタンでマッタを従える。さらにチャチュはブラフマーナーバードでアガム・ローハーニーと戦い，後に和平を結んでアガムの一族と姻戚関係となる。最後にマク

表　チャチュ朝下スィンドの主要都市・砦の支配者（一部 Maclean 1989 : 39 に基づく）

都市・砦	チャチュ下 チャンドラ下	アラブ軍侵入時
Daybul		Jāhīn b. Barsāyad？（B）(107/82)≫Nīrūn（110/86)≫Bet？
Nīrūn		Sundar（B）(93, 116-18/72, 91-93)
Mawj		Bajhrā b. Chach≫ 住民の協力が得られず Būdhiya へ移動(118-19/93-95)≫Sīsam で殺害される(123-24/98)
Sīwastān	Matta（39/31） ＞Chand Rām Hāla？	Bajhrā b. Chach？（118-21/93-95)＞Chand Rām Hāla（アラブ軍 Mus`ab に駆逐される）(145-46/116)
Bandhān		Kāka b. Kotak（B）(121/95)
Sīsam		Kāka b. Kotak（B）(120/95)＞Bajhrā b. Chach が占領
Budīhiya/Sīwīs	Kota（Kīh）b. Kāka (39/30-31)	Kāka b. Kotak（B）(122-23/96-97) Dhol b. Chandar も居住（197-98/156)
Bhatlūr		Dāhir に反抗する人々（124/98)
Bhattīyān		Rāsil b. Dāhir？(132/105)
Ishbāhar		
Bet		Rāsil b. Dāhir あるいは Jāhīn≫ 二人とも Raor へ向かう（126, 133/100, 105) ＞Moka b. Basāya（アラブ側）(135-36/108) ＞Rāsil b. Basāya（Dāhir 側）(157/124)
Qissa（Qassa）		Moka b. Basāya（133, 136/－） ＞Darohar（Kīraj のマリク？）(218/172)
Sūrta		Moka b. Basāya（133/－）
Sākra		Moka b. Basāya（133/－）
Rāor	Chach と Dāhir が建設 (54/42-43)	Jaisiya（Dāhir 没後） ≫Brahmanābād（194-93/152-53)
Bahrūr		
Dahlīla		Rāj（Dāhir の従兄弟)≫ 東へ逃亡（199/157)
Brahmanābād	Agham Lohānī＞Duraj＞Dharsiya	(204-06/161-63)
Sāwandī		Jatt の仏教徒と商人が居住（219/173)
Sahta		(221/175)
Aror		Qofi≫Jitor へ逃亡（221-27/175-78)
Bātiya	Chitra（34-35/26-27） ＞Sūban（54/43)	Chach b. Dharsiya（197/156) Kaksa b. Chandra（これ以前は Dāhir とともに Raor 在)≫ アラブ軍に合流（235-36/187-88)
Iskalanda		Kund Rāi の甥？(237/188)
Sikka	Sīhūl（Bajhrā の甥）(35/27)	Bajhrā（Bajhrā Tākī の孫）(237/188)
Multān	Bajhrā Tākī（Sāhasī の血縁者） (35/27)	Kund Rāi（237-38/189)

※ページ数表示は，ペルシア語テキスト/英訳。
※記号 ＞ は支配者の交代を，≫ は人物の移動を意味する。

ラーンに向かい，山岳地帯のトゥーラーン Tūrān の人々と貢納の契約を結ぶ。この遠征の描写によって，読者は，スィンド人によるスィンド地方の地理認識や勢力図を把握することができる[4]。

チャチュの遠征の結果，バーティヤのチトラやスィーワスタンのマッタといった地域勢力は排除された。特に，支配者アガム・ローハーニーの一族がチャチュの一族と姻戚関係を結んだブラフマナーバードはチャチュ一族の支配下にしっかりと組み込まれ，王朝の中心地の一つとして発展することになる（表）。

2　チャチュ朝下の社会変化

ラーイ朝からチャチュ朝への交替は，支配者が奉じる宗教や支援する社会層の交替でもあった。7 世紀半ばにスィンド地方を訪れた玄奘は，当時の王をシュードラの仏教徒であると記録している［『大唐西域記』3 巻，332 頁］。ラーイ朝王家が代々仏教徒であったとは断定できないが，サーハスィー王がバラモンでなかったことは，彼の兄弟マハラトがバラモンでないことから確定できる［CNd : 28 ; CNt : 22］。一方チャチュはバラモンであり，おそらくシヴァ派のパーシュパタ派に属していたと推察される［Maclean 1989 : 16-17］。チャチュの後を継いで 7 年間治めたチャンダルは，「バラモンの教え（dīn-i nāsikān wa rāhibān)」[5]を支援・推進したと伝えられる［CNd : 50 ; CNt : 43］。

チャンダルの後を継いだ息子のラージと，彼の後王位に就いたチャチュの息子ダルスィヤはブラフマナーバードを首都としたため，チャチュ朝の中心地は南へ移動した[6]［CNd : 54-55 ; CNt : 42-43］。この移動の結果，相当数のバラモンがスィンド南方に移住したとみられる[7]。ムハンマド・ブン・カースィムによるブラフマーナーバード占領時には，多くのバラモンがブラフマーナーバード周辺の村々の地税（ハラージュ）の責任者となっていることから，地域社会へのバラモンの定着とブラフマニズム的な価値観に基づく社会秩序の浸透は，デカンやベンガルと同様，農業開発とともに進行したと考えていいだろう［CNd : 210-211 ;

4）ただし，先の段落でも指摘したように，ラーイ朝やチャチュがこれらの地域に対して有効に支配力を及ぼしていたかは疑わしい。ウィンクはダーヒルの支配領域をムルターンより南の下シンドのみだと推察している［Wink 1996 : 147］。アラブ軍侵入時にムルターンとその南のスィッカが協調して抵抗していること，またその際にスィッカを支配していたのはラーイ朝のサーハスィー王の孫であることから，イスカランダ，バーティヤ周辺もダーヒルの支配下には入っていなかったと見るべきであろう［CNd : 237-38］。

5）『チャチュ・ナーマ』に見られる nāsik や rāhib といった語を無条件に仏僧とすることについての検証と批判については，［Maclean 1989 : 12-14］を参照されたい。

6）ダーヒルは，自らの拠点であったアロールとブラフマナーバードに 4 ヶ月づつ留まる，一種の二重首都制度を採用した［CNd : 68-69 ; CNt : 54-55］。

7）12 世紀にアラビア語からペルシア語に翻訳された *Majma' al-Tawārīkh* では，スィンドへのバラモンの移住は，『マハーバーラタ』に登場する伝説的な王ドゥルヨーダナ Duryodhana に帰されているという［Wink 1996 : 149-150］。

CNt : 166-167 ; 古井 2007 : 179-180]。

チャチュ朝下のスィンドでブラフマニズム的価値観に基づく社会編成が進んでいたことを示すもう一つの記録として，ダーヒルの宰相スィヤーカルが，ムハンマド・ブン・カースィムに対して，スィンドの先住民であるジャット Jatt[8]のローハナ族を非文化的で社会的地位が低い人々と説明していることが挙げられる[9] [CNd : 214-216 ; CNt : 169-170]。これは，バラモンが，土着の部族民を不可触民として社会秩序の中に取り込んで行く過程を示していると解釈できる。スィンドを征服したアラブ・ムスリムは，このような社会秩序をそのまま認める立場を取った [CNd : 208-216 ; CNt : 166-170]。

3 ダーヒル時代のチャチュ朝によるスィンド支配

最後に，アラブ・ムスリム軍の侵攻に際して，ダーヒルがどのような勢力を動員して抗戦したかを通して，ダーヒル時代のチャチュ朝の支配体制について分析したい。

まず，ダーヒルがアラブ・ムスリム軍と直接対決した際の軍の構成を扱う。この戦闘はダイブルの占領以降最も大きな戦いであり，ダーヒルが直接軍を率いていることから，当時彼が動員しえた勢力が最も良く反映されていると判断されるからである。ダーヒルは軍を中央，右軍，右軍，後衛に分け，自らは象に乗って中央に陣取り，そのまわりを象で囲んだ。右軍はダーヒルの息子ジャイスィヤ Jaisiya と，アビー・ブン・アルジュン Abī b. Arjun と小クワールの祖父大クワール Kuwār-i Akbar jadd-i Kuwār-i Aṣġar が，左軍はダーヒルの甥のジーバン Jīban と，バシャル・ブン・ハウル Bashar b. Hawl とクタイバ・ブン・バシャル Qutayba b. Bashar，後衛はダーヒルの息子ダルスィヤ Dharsiya と，スィンド北部のカンバ Kanba の王ビール Bīl をはじめとするスィンドの精鋭（ikhtiyārān-i Sind）や東方のジャットの諸部族が配された [CNd : 173-74 ; CNt : 137]。右軍，左軍，後衛ともに，指揮官はダーヒルの息子あるいは甥であったと判断される。

ダーヒルの右軍と左軍で名前が挙がっている指揮官 4 名のうち，左軍の 2 名はムスリムと

8） アラビア語ではズット Ẓutt。また，ジャートとも呼ばれる。スィンドやパンジャーブに居住していた牧畜民。一部はイラン・イラクなどに移住した。また，亜大陸内ではラージャースタン地方やデリー周辺にも拡散し，農耕に従事するようになった。一部の集団は自らをラージプートと称している。今日のインド共和国では後進諸階級（Backward Castes）に分類されている。

9） このようなブラフマニズム的価値観の浸透の一方で注目されるのは，チャチュは先王サーハスィーの未亡人，ダーヒルはジャットの血を引く自らの異母姉妹と，王位を得るために結婚しているという事実である。バラモンにとって，未亡人との再婚や異母姉妹との結婚は禁忌であり，部族民との結婚も忌避するべきことである。しかし，宰相であったチャチュが王になるには先王の未亡人との結婚が必要であった。また，ダーヒルは，異母姉妹の配偶者がヒンドゥスターンの支配者になるという占星術師の託宣があったため，彼女との結婚を決意している [CNd : 56 ; CNt : 43-44]。つまり，これらの婚姻関係において，女性は王権の源であり，おそらく同時に土着性の象徴でもある。このような，バラモンの王と権力の源たる女性の婚姻という現象は，シヴァ派シャクティ派の影響，あるいは当時のスィンドにおける地方的な王権観の反映である可能性がある。しかし，これ以上の議論は筆者の能力を超えているため，指摘に留めておきたい。

おぼしき名前である。ムハンマド・カースィムの侵攻の前から，アラブ・ムスリムは武装勢力としてスィンド地方に流入していた。『チャチュ・ナーマ』で最も頻繁に登場するのは，マクラーン地方から逃亡してきたムハンマド・イラーフィー Muḥammad 'Ilāfi である。ダーヒルは，北方のラマル地方の王がスィンドに侵攻してきた際に，500 騎の騎兵を率いた彼の協力を得て敵を撃退した［CNd : 70-71 ; CNt : 56］。ムハンマド・ブン・カースィムとの戦いの際，イラーフィーは戦闘に加わることはなかったが，終始ダーヒル一族に協力している[10]。このような経緯からみて，ダーヒルがムハンマド・ブン・カースィムとの決戦においてアラブ・ムスリムの騎兵を用いるのはむしろ自然なことであると言える。ダーヒル軍の構成要素は，彼の親族と，彼に協力的なスィンド地方北部の諸勢力や部族民，そしてアラブ・ムスリムの自律的武装集団であった。

スィンド各地での抗戦に目を転じると，そのほとんどはダーヒルの親族が指揮するものであり，ダーヒル没後に息子ジャイスィヤが助力を仰いだのは，スィンドの各地域の有力者ではなく親族であった［CNd : 197 ; CNt : 156］。スィーヴィースのカーカ Kāka や，ベート Bet 地域のモーカ Moka とラースィル Rāsil 兄弟などの地域有力者は，自らの地位が保証された場合，アラブ・ムスリム軍に対してむしろ協力的な態度を取った［CNd : 122-24, 156-57 ; CNt : 97-98, 124-25］。また，地域住民も抵抗にはおしなべて非協力的であり，モウジュ Mowj やニールーンの例のように，ダーヒル一族への協力を拒み，アラブ・ムスリム軍と自律的に和平を結ぶこともあった［CNd : 93, 116, 118-19 ; CNt : 72, 91, 93］。

以上から，ダーヒルの支配体制は自らの親族に大きく依存したものであったと言える。スーヴィースのカーカのもとにチャンダルの息子ドール Dhol がいた例から，一部の地域支配者のもとにはチャチュ朝の王族が派遣されていたと見られる。しかし，王族と地域支配者や地域住民が十分に協調的な関係を構築するには至っていなかったのであろう。

チャチュ朝が，その始まりから地域勢力を吸収あるいは統合した統一的地方王朝への指向を持っていたことは，チャチュの遠征から明らかである。それは結局達成されず，５代目のダーヒルの時代にも，多くの地域勢力は自律的に行動しており，アラブ・ムスリム軍の侵攻に対して，王族の血縁的紐帯を越えて協調・抵抗しようとする動きはほぼ見られなかった。しかし，チャチュ朝下では，一部地域勢力の統合や再編成，南スィンドへのブラフマニズム的社会秩序の浸透や農業開発といった重要な社会変化が生じた。アラブ・ムスリム軍は，バ

10）『チャチュ・ナーマ』に登場するムハンマド・イラーフィーは，694 年，マクラーンにおいてハッジャージュが派遣した代官を殺害して一時独立した兄弟の一人と同一人物であると考えられる［『諸国征服史』37 頁］。ムハンマド・ブン・カースィムとの戦闘の際にダーヒルから協力を請われたムハンマド・イラーフィーは，ムスリムとは戦わないが助言を与えると返答し，実際に決戦の直前までダーヒルのもとに留まっていた。ダーヒルは息子ジャイスィヤのもとにイラーフィーを送り，両者はダーヒルの没後しばらく同行した。ムハンマド・イラーフィーは最終的にカシュミールに向かったとされる［CHd : 160-161, 170-172, 193, 203 ; CNt : 128, 136, 153, 160］。

ラモンをハラージュ納税の責任者として認め，またジャットの社会的地位の低さについても容認する立場を取ったため，それらの社会変化はアラブ支配下のスィンド地方社会においても継続したと考えられる。『チャチュ・ナーマ』は，アラブ・ムスリム軍による征服の記録であると同時に，征服によって途切れなかった地方社会の形成過程をも伝える史料なのである。

参考文献

CNd : 'Alī b. Ḥamīd b. Abī Bakr al-Kūfī. *Chach-nāma,* ed. 'Umar b. Muḥammad Dā'udpūta. Delhi : Maṭba'-i Laṭīfī, 1939 ((repr.) Tehran : Asāṭīr, 1384HS).

CNi : Do. *Chach-nāma (Fath-nāma-yi Sind),* ed. Nabī Bakhsh Khān Balūch. Islamābād : Institute of Islamic History, Culture and Civilization, 1983.

CNt : Do. *The Chachnamah : An Ancient History of Sind,* tr. Mirza Kalichbeg Fredunbeg. Karachi, 1900 ((repr.) New Delhi : Idarah-i Adabiyat-i Delli, 1979)

Imperial Gazetteer of India, 23 vols. Oxford, Clarendon Press, 1908-1931.

玄奘『大唐西域記』全3巻，水谷真成訳注，平凡社，1999.

花田宇秋（訳）「バラーズリー著『諸国征服史』21」『明治学院論集』656，2001年，29-72頁.

Chattpadhyaya, B. (1994) *The Making of Early Medieval India.* New Delhi : Oxford University Press.

Friedmann, Y. (1977) A Contribution to the Early History of Islam in India. In : M. Rosen-Ayalon (ed.) *Studies in memory of Gaston Wiet.* Jerusalem : Institute of Asian And African Studies, the Hebrew University of Jerusalem, pp. 309-333.

Friedmann, Y. (1984) The Origins and Significance of the *Chach Nāma.* In : Y. Friedmann (ed.) *Islam in Asia, vol. 1 : South Asia.* Boulder : Westview Press, pp. 23-37.

Friedmann, Y. (1993) Muḥammad b. Ḳāsim, *Encyclopedia of Islam* VII.

Friedmann, Y. (2004) Čač-nāma, *Encyclopedia of Islam* supplement.

Gabrieli, F. (1958) Muḥammad ibn Qāsim ath-Thaqafī and the Arab Conquest of Sind. *East and West,* New ser. 15, pp. 281-295.

古井龍介（2007）「グプタ朝の政治と社会」山崎元一，小西正捷（編）『世界歴史大系　南アジア史1』山川出版社，163-188頁.

Habib, I. &F. Habib (2012) *An Atlas of Ancient Indian History.* New Delhi : Oxford University Press.

Hardy, P. (1981) Is the *Chach Nama* Intelligible to the Historian as Political Theory? In : Khuhro, H. (ed.) *Sind through the Centuries.* Karachi : Oxford University Press, pp. 111-117.

Maclean, D. N. (1989) *Religion and Society in Arab Sind.* Leiden : E. J. Brill.

Wink, A. (1996) *Al-Hind : The Making of the Indo- Islamic World,* vol. 1. Leiden : E. J. Brill.

（青山学院大学文学部）